



浦和学院高等学校では、
東日本大震災以降、

何を感じ、
何を考え、
何を行動するか!!
ライフスキル教育の原点である。

未曾有の大震災の教訓を教育の中に活かすこと。

第 61 回交流活動「石巻復興きずな新聞配布」 28.09.26～29 石巻・東松島交流センター

参加者感想文 「ボランティアに参加して」

2年 E 組 N. K. (草加市立草加中学校出身)

1. 石巻・東松島（東北）にボランティアに行こうと思った目的（動機）は何か？
(リピーターの場合は、前回の目的との違いを明記する。)

自分が東北に行くことで少しでも被災地の方々の役に立てればいいと思ったからです。そして現地でしか感じられないことを感じて、3月11日に何があったのかをしっかりと自分の目で見て勉強しようと思い、被災地の方々の心の傷を少しでも癒せればと強く思いました。

2. 平成23年（2011）3月11日、あなたはどこに居て何を感じたか？

小学校に居て教室で数学の自習をしていました。今でも明確に覚えています。最初は「地震だー。」というような軽い気持ちでしたが、徐々に揺れが強くなってきて机の下に避難しました。この時は単純に「怖い。学校は壊れないのかな。」という感情しかありませんでした。家に帰るまで、時間がかかりその日の夜はカップラーメン1つを食べました。でも、カップラーメン1つ食べられるだけで幸せだなとテレビを見て改めて思いました。

3. ボランティア出発前の「被災地に対するイメージ」を記入してみよう。

最初は、石巻ボランティア説明会のビデオを見た通り、瓦礫がたくさんあって歩く場所もないようなイメージを抱いていましたが、よく考えるとテレビのニュースで見たことがある「仮設住宅」が並んでいて少しずつ復旧しているイメージがあります。でも中には、「仮設住宅」にも住めない方もいてやはり生活は苦しいイメージを現在は持っています。

4. 自分はこのボランティアから何を学びたいか。

被災した方々が、どのような生活をしているのか・本震から今まで何があったのかを1、2で書いた通り、自分の目でしっかり見て・感じて学びたいと思います。実際に話を聞いたりして、自分に今何ができるのかを学びたいです。そして、自分が学び感じとったことを周りの友達に教えたいです。

5. 石巻・東松島に「行く前」と「行ってから」の違いは何か。あなたは参加して「何を感じ、何を考え」ましたか。そして、この瞬間から「何を行動」しますか。

「行く前」は被災地という場所を曖昧にしか想像できていなかったけれど、「行ってから」は現実を突きつけられた様な感じで言葉が何もできませんでした。ボランティアという活動だけではなく、もっと他にもできることがあると考えましたが、今、私たちにできることは『支援』だと思うので1度しかない人生を自分なりに精一杯生きます。今、私ができる最も重要なことだと思います。

この石巻・東松島のボランティアに参加して色々なものを感じました。最初は、『被災地』という場所と『被災者』がどのような生活をしているのか大まかにしか想像することができませんでした。

実際に行くと、明け方バスの中で仙台駅を見たら東京と変わらないビルや家があって「あれ？思ったのと違う…」と感じました。しかしその後に石巻の海岸側に進んでいくと、仙台とは全く違った風景がならんでいました。一家族全員が亡くなってしまった為に家を壊すことができていない家や、普通のマンションのような復興住宅が大きく建っていて周りには雑草と「がんばろう！石巻」の看板がありました。何の音もしない・人影が少ない…私達が住んでいる埼玉ではこのような状態の地域はありません。あまりにも（仙台駅と）ガラッと景色が変わったので放心状態になってしまい、何も言葉にすることができませんでした。これが本当の『被災地』だと自覚しました。よく考えると大まかにしか想像できていない自分が恥ずかしく、情けなくなりました。

その後に『復興きずな新聞』を仮設住宅に住んでいらっしゃる方々に届けに行きました。仮設住宅の方々は私が思った以上にとても元気で優しい方々でした。石巻の有名な食べ物を詳しく教えてくださった、笑顔が素敵なおばさんや大震災当日の話をわかりやすく教えてくださったおじいさんなど他にもたくさんの方々が住んでいました。一人ひとりが少しでも現状をよくできるように考え・努力している姿がとても眩しくて感動しました。私達もボランティア活動ができている（させてもらっている）ことに感謝しなければならぬと改めて思いました。私達が石巻・東松島で美味しいご飯を食べれたこと、銭湯にゆっくり入れたこと、朝のパンが準備されていること…など、たくさんの方の協力がなくてはできないことだったことを忘れてはいけません。私は『ボランティア活動』をする以前にもっと人として大事なことができていなかったことに気付かされました。

大川小学校は実際に行くと雰囲気（空気）が他のところとは全く異なり、物音一つしない静寂な場所でした。学校をまると飲み込む津波を想像することさえできませんでした。校庭で遊んでいた子・授業をうけていた子・先生方の像が頭の中に一瞬浮かびました。慰霊碑を見ていたら突然涙がでてきて、私もしここにいたらと考えるだけで恐怖でした。そして亡くなった方々の年を見ると、当時私達と同じ年だった生徒もいて複雑な気持ちになりました。たくさん感情が入れ交わって涙がとまらなくなりました。

私達にも、いつ災害がやってくるかわかりません。その災害に対して危機意識を持ち、自分の命はしっかりと自分で守ります。そして平和な日々を送れていることに感謝をして、被災で亡くなった方々の分まで一生懸命生きたいです。いや、生きます。



1. 石巻・東松島（東北）にボランティアに行こうと思った目的（動機）は何か？
（リピーターの場合は、前回の目的との違いを明記する。）

元々、東北の復興の手伝いがしたいという思いがあり、何度か復興庁のホームページで現在の状況の写真を見ていたのですが、実際自分の目で見て現地の方々の声を生で聞きたいと思い今回のボランティアに参加しました。5年経った今、被災地はどうなっていて、住民の方々は何を思いながら暮らしているのか、私は今後、大学で都市づくりを学ぶのですが、震災後の地域を活性化させるとなった時の参考にしたいです。今回のボランティアで住民の皆さんに少しでもお力になればと思います

2. 平成23年（2011）3月11日、あなたはどこに居て何を感じたか？

小学校で帰りのホームルームの最中でした。初めは、何が起きているのか全く理解できず、周りは地響きの音が鳴り響いていて花びんが落ちて粉々に割れたり、泣きわめいているクラスメイトばかりでした。外に避難すると昇降口のタイルにひびが入っていたりして大地震が起こったのだと理解しました。それと同時に、家族が心配でした。怖さよりも家族が心配でした。父・母・兄・飼犬や祖母も皆無事だと知り、母が学校まで迎えに来てくれた瞬間に地震への恐怖が込み上げて涙が止まりませんでした。あの時の感覚は忘れられません。

3. ボランティア出発前の「被災地に対するイメージ」を記入してみよう。

がれき処理はほぼ済んでおり、公共インフラの復興も、少しずつ進んでいるという事を知りました。被災地に対するイメージも、5年経った今ではすっかり報道番組で見る事も無くなってしまい、自分の目で見て確認するまで勝手に被災地は、「こうだ」と決めつけてはいけないと思っています。ただ、1つ思う事は、東日本大震災はこれからも次の世代の人たちにも伝えていくべき出来事だと思っています。

4. 自分はこのボランティアから何を学びたいか。

震災に負けずに東北地方で生活を送っている方々の強さを学びたいです。また、被災を現場で感じたからこそ言える、これから何を思って私たちが生活していくべきなのか、また、もし再び同じような出来事があったときに被災した人々にどんな言葉をかけてあげるべきなのか、心のケアの部分などでもたくさん学習したいです。

5. 石巻・東松島に「行く前」と「行ってから」の違いは何か。あなたは参加して「何を感じ、何を考え」ましたか。そして、この瞬間から「何を行動」しますか。

今、生きている事に感謝したいです。たくさんの人々の支え合いが誰かを助けます。これから、命の重さについてよく考え、過ごしていきたいです。

私は今回、初めて石巻・東松島のボランティアに参加しました。

行く前に少し復興庁のホームページで現地の写真を見ていましたが、実際に見るのとでは全く別物でした。普通に広場のように見えた部分が「全て住宅地だったんだよ。」と聞いてここまで津波の威力があるものなのか、と驚きを隠せませんでした。

マイクロバスで移動して、現地で初めて会った漁師の方があいさつをした際に発した「命を大切に」という言葉には死を間近で体験した事からなる重みをととても感じました。また新聞配付を行っている時には、仮設住宅で暮らす方々の生きた声を直接聞く事が出来ました。私が直接聞いた話の中には、スーパーで買い物中に津波が来て、中に居た人たちで助け

合ったことや目の前で妊婦さんとその子どもが流されて行くのを見たことなどがありました。ボランティアに行って一週間が経った今でも5年前の震災の日のことを話してくれた時のおばあちゃんの顔が忘れられません。また別の方は、私が新聞を手渡しし、多少会話をした所で「そうなの、わざわざ埼玉県からこんなおばあちゃんの為にボランティアに来てくれたのね。ありがとう…ありがとう…」と目に涙を浮かべ強く私の手を握って頬にあててくれました。それまで他の仮設に新聞を配付しに行ってもなかなか手渡しで受け取ってもらえず、やるせなさを抱えていた私は、その一瞬で心の中の色が変わりました。もっと頑張ろう、と思いました。仮設住宅をまわってたくさんの人々とお話しして行く中で、私が今こうして暮らしていける事は平凡な事だけけど一つの命として生まれた事は特別で、「平凡」という事がどんなに幸せな事なのか、と身にしみて実感しました。

そして、最終日に向かった大川小学校。見た時には言葉にあらわせない感情がふつふつと湧いてきました。この場で、当時小学生で亡くなってしまった時は、どんな恐怖の中で津波に飲まれていったのだろうか、と思いました。まだ6才～11才で、どんなに怖かったらうと思いました。5年経って、今は片付けもだいぶ済んだ状態だったけど、震災当初の風景を聞いて、想像もつきませんでした。慰霊碑の前で手を合わせ、この事は風化させてはいけない、と改めて感じました。

これから生まれてくる命を大切に、この出来事を忘れないよう、過ごしていきます。本当にたくさんを学びました。とても良い経験になり、これからの学生生活で今回学んだ事を活かしたいです。



2年W組 M. K. (加須市立大利根中学校出身)

今回このボランティアに参加して、初めは5年が経ち建物もだいぶ建ってきたため、自分は何をすればいいかよく分かりませんでした。でも、実際に石巻に行くと私はたくさん得る事ができました。建物はたしかに5年前より建ってきたところは多くなってきましたが、場所によっては、あの5年前のままであったり家の土台だけ残っていたり、未だ震災が起る前より全然復興していないということが分かりました。震災後の景色を見るとやはり心が痛くなり涙が出てきます。

2日間を各仮設住宅を回ってきずな新聞を配りました。5年経った仮設住宅には、人はあまり住んでいなく、だいぶ復興はしてきたのかなと思いました。でも未だ仮設住宅に住んでいる人たちに話を聞くと、5年前の事を話し、表情がどこか悲しそうでした。私は上手に話しが出来ず、どうすればいいのか正直分かりませんでした。配っていて、住宅の方々と話を頑張って続けようとしたのですがどう続けていいのか分からず、すぐ話が終わってしまいました。これが私の1日目の反省です。2日目は1日目よりも積極的に話題を作り、話をしていると1時間以上も話をする事ができました。話をする事によって、住宅の方々のちょっとした不安を少しでも私たちがやわらげる事ができたのかな？と感じました。

私は3日目の大川小学校に行った時、ものすごく悲しく、辛い気持ちになりました。ここで、あの大きな津波にたくさんの人たちは流されてしまったのかと。慰霊碑には亡くなった方々の名前があり、中には、家族で亡くなっていて津波は怖いと改めて感じさせられました。大川小学校を見て、建物はボロボロで、通路がひき波によってたおれてしまったり、とても大きな被害だったんだなと私は思いました。どうにもする事は出来なかったけど、少しでも私たちがこの災害の怖さを理解し、家族やたくさんの人に伝えていくべきなのかなと思います。

埼玉は大きな山もなければ、海もありません。被害に遭うことはまずないかもしれませんが、けれども、どこかでまた大きな被害があったら、すぐ助けに行けるようにしたいです。少しでも役に立てるような事をできるようにしたいです。募金をしたり、何かを寄付したりしたいです。今回のボランティアで得るものはたくさんあったし、たくさん体験をする事が出来ました。私は看護師になるという夢もあるので、今回のボランティアの体験を機に、心のケアをしていきたいです。私たちのためにたくさん準備をしてきてくれた人に感謝をしていきたいなと思います。

2年V組 K. N. (上尾市立原市中学校出身)

今年で2回目の参加となり、前回よりリラックスして活動できたと思います。2日目、きずな新聞の配布を始めたときは、やはり勇気を出せず聞けなかったり、話が続かなかったりして大変でした。3日目は、2日目の反省を活かして質問をいくつかしたり、会話を続けようと言葉を選んだりすることができ、色々な人達の話が聞いて本当によかったです。

ご飯も、海鮮丼やえごま豚、のりうどんも、去年食べたもの以上にすごくおいしかったです。

ボランティア参加の目的に「自分を考え直すため」と書きました。私は今2年生で来年には大学選び、受験になります。この時期から大学選びと言うより目星をつけなければなりません。ですが、その目星すら見当が付きませんでした。頭がいっぱいになっていたので何か頭を切り替えることが必要でした。

もう一つの目的に「少しでも元気を届けたい」と書きました。石巻へ行って、元気を届けられたと思っています。そして考え直して分かったことがあります。自分は誰かのためになることをしたいと。自分の好きなことで誰かのためになれば、元気や笑顔を届けられたらと考えることができ、目星もついてきました。その意味もあり、このボランティアに参加できて良かったと思いました。

ありがとうございました。



2年P組 A. T. (さいたま市立三室中学校出身)

今回で2回目の参加でした。去年と比べて何がどのように変わっているのか、もっと現地の人とたくさんお話や交流をしたいと思いますと思い参加しました。

石巻に到着して一番最初に思ったことは「あまり変化がなくて残念だった」ということです。1年前と今、1年経っていれば全然変わっていてもおかしくはないと思っていました。特に変わっていないと思った場所は大川小学校に行く途中の道路です。去年と全く同じものを見ているようでした。

きずな新聞を届けるときの変化で印象的だったことは、住んでいる人がとても減っていたということです。1つの棟全てが空き部屋だったり昨年とは真逆でした。

今回は4ヶ所の団地に行きましたが、全てに共通して言えることは「人が減った」ということです。公営住宅に当たって行かれる方が多くてよかったと思う反面、寂しい気持ちもありました。初日はあまり話題が思いつかず苦労しました。「お茶っこ」した時も会話が途切れてしまったりと何を話して良いのか分からなくなってしまったことがありましたが、ゆっくり課題を見つけては質問をしたり、質問されたりであっという間に時間が過ぎていました。その「お茶っこ」させて頂いた方は昔の震災のことはあまり考えず、今を楽しく過ごしているという感じがしました。

2日目は、初日の「課題が思いつかなかった。」ということがないように、新聞を手渡しする際に、何か思ったこと、例えば天気のこととかを話してみると、そこから話が広がり、たくさんの人とたくさんのお話をすることができました。話をしているうちに周りの人がどんどんいなくなっていく、というお話になり、公営住宅ができたことによって仮設住宅のコミュニティが壊されてだんだん独りになっていくと聞きました。しかし、そこからまた新しく他の人と仲良くなることによって独りではなくなると教えてくれました。仮設住宅に住んでいるほとんどの人が前向きに考え、日々生活をしているのだなと思いました。

ボランティア全体を通して、「命」に対する考え、普段できていることが「当たり前」と思うのではなく、いつ、どのような状態になってもそれに対応できるようにしておく、ということに改めて考えさせられる日でした。

3年F組 H. I. (さいたま市立大砂土中学校出身)

私はボランティアに参加して、意識が変わりました。東日本大震災から5年たった今でも被災地はまだまだガレキが多く残されていました。

私は2日間仮設住宅を回りました。仮設住宅でたくさん貴重なお話を聞かせていただきました。その中でも印象的だったのが、佐藤隆一さんというおじいさんです。佐藤さんの家の中に入れて頂きました。震災で妻と息子を亡くしたこと。周りに人がいなくて1人だということ。仮設住宅には5年7ヶ月住んでいること。とても優しい方でした。また、仮設住宅をまわっていて、「高校生と話していると元気がでるわ〜」と、とても多くの方に声をかけていただきました。

私は将来サービス業に勤めたいと考えているため、人の話を聞くこと、相手の目線に立って話を聞くことを身につけようと努力しました。中には、辛くて話をさせてくれない方もいましたが、普通はそだよな…と考えました。車谷さんが「昼は元気だけど夜はみんな沈んでいる、カラ元気だよ」と言っていた意味がわかったような気がしました。

今回このボランティアを通して、ボランティアに参加できることに感謝をしないといけないということもよくわかりました。地元の方たちがごはんを食べる所や寝る所を提供して下さい、初めて私たちがボランティア活動できることに感謝しました。今、自分にできることは何かということをしっかり考え行動し、私のこれからの人生に活かしていきたいと思いました。自分に自信を持つたこと、もっと努力しないといけないとわかったこと、また今の被災地の現状を1人でも多くの友達に伝え、ボランティアに参加する人が増えればいいなと思います。

今回のボランティアに参加できて本当によかったです。ありがとうございました。



この活動は、生徒の自主的参加はもちろん、教職員のバックアップ体制があって成り立っている。

今回61班は、主管である国際教養・ライフスキル部生徒活動係長の大澤奈保子（英語科教諭）、事務部総務係長の安斎貴志、事務部労務管理系の田辺美奈子が引率として参加した。それぞれが多忙な毎日を送っている中、参加生徒たちのために、快く引率を引き受けてくれる。

昼間はボランティアとして同じ活動を行い、マイクロバスを運転し、深夜には病院への付き添いも行う。旅行添乗員も付かないので、手配や会計の仕事もしなくてはならない。

さらに、現地の方々が、浦学生を温かく迎えて下さり、大きな支えがあることも忘れてはならない。

（石巻・東松島交流センター長 車谷 裕通）

ボランティアに参加して 事務部 田辺美奈子

5年半前のあの日、テレビで見た津波や被災地の様子は衝撃でした。何かできることはないかと、友人と集めた食器や日用品を何度か現地に行く知り合いに託しましたが、自分では行かれず、気にはなりながらも、今になっていました。その間にどれだけ沢山の方々が、被災地に足を運び、復興のために頑張ってくられたか、こつこつと支援を続けてくれたかを思うと、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

現地では、市街地を車で回りながら、震災直後の石巻の様子を聞きました。海からはだいぶ離れている町の交差点に大きな漁船が流れてきたり、車が家の屋根に乗っていたり、建物が引き波によって津波がきた逆方向に倒れていたりしていたそうです。今は建物も新しくなり町もきれいになっていますが、少し離れると、家の土台だけ残っていたり、一階が津波で壊れ住めなくなってしまう家がまだまだ残っています。

「津波浸水深ここまで」という印も想像を超えていて、大切なものもなにもかも飲み込まれてしまったんだと思うと胸が苦しくなりました。



石巻きずな復興新聞の皆さんの活動は、家族や住み慣れた家をなくし、地域を離れてコミュニティを失った現地の方々の心に寄り添い、支えになっています。復興住宅ができ、仮設住宅が統合されていくこれからは、さらに心のつながりが大事になるのではないかと思います。浦学の生徒が訪問するのを楽しみに待っていて下さるのも、嬉しいことです。よい活動をリレーして下さった先輩方のおかげです。また、私たちのボランティアのために、現地の方々がたくさん力を貸して下さいます。ボランティアは皆さんのおかげで「させていたでている」ものだと有り難く思いました。



帰ってきて、友人をよんで「のりうどんの会」と称して、ボランティアのしおりと現地の写真をみてもらい、説明しながら、のりうどんやのり、お菓子をいただきました。すると、みんな「ずっと気になっていた」ことがわかりました。なにかしたいと思っていました。なかなか、現地にはいられないけれど、買い物することならできるので、他の人にも声掛けしてお取り寄せをすることになりました。

今回のボランティアに行かせていただいて、日常は一瞬で変わることを実感しました。だからこそ家族や周りの人たちと過ごせることを、もっと大切にしようと思いました。私にとって何気なく過ごしていた日々に対する思いを変えてくれた、とても貴重な体験でした。有難うございました。